

へフランス教育史コレクションに寄せて

近代フランスにおける教育の諸相と展開

—— 其の一 十六世紀～十八世紀 ——

石 堂 常 世

はじめに 早稲田大学では、一九八二年度、五〇〇冊にのぼるフランス教育史関係古書のコレクションをセット購入した（教育学部教員図書室所蔵）。知るところによれば、当コレクションは、オランダの国際古書市場で競り落とされた掘り出しものだそうだが、出所源に関するこれ以上の情報は、販売元に尋ねても明らかではない。しかし、当コレクションの内容にみる専門的緊密度、さらに、為されている装丁の多くの、同一年代的な特徴から推察するに、これらの古書は、業者が寄せあつめてつくり上げたセットというよりも、教育あるいは教育学に、生涯においてたずさわったフランスの二三の家系または人物の蔵書の一部を成していたものであり、子孫によって今日手放されたものではないか、と考えられる。

これはあくまでも私的推量であるが、蔵書の内容を吟味してみるならば、高等教育に関する資料が少ないことなどもかんがみて、視学官 *inspecteur*（それかなりの身分の視学官）を何代かにわたって務めた家系などが出所源の一

つとして想定される。あるいはまた、十九世紀の公教育省 *le Ministère de l'Instruction Publique* (今日の文部省に相当する) の高官の家系、もしくは十九世紀後半に活躍した教育学者(当時、今日でいう教育学者は稀であり、大抵は視学官であった)の家系かとも考えられる。また、所蔵家たちをたどっていけば、宮廷に関わりを有した高官がおり、何らかのかたちで教育の任務にたずさわっていた先祖がいると思われる。ともあれ、一九六〇年代からフランスに興隆した、教育学研究の「新しい波」(教育学 *les sciences de l'éducation* の勃興⁽¹⁾)が押し寄せてくる直前に、最後の代のコレクターたる人は相当な高齢となって世を去ったことが、これら書物の時代別分布と内容のとぎれから判断できる。蔵書の傾向からみて、もう一つ言えることは、所蔵者は熱烈な共和主義者にして、ライシテ *le laïcité* (教会の権力すなわち教権を、教育の領域から排除し、公教育の世俗化を推進する)運動⁽²⁾の擁護者であつたらしいということである。もちろん、無神論者ではない。共和主義者でライシクな教育を求める態度は、国家が教会に代わって教育管轄の主導権を掌握しようとするその移行期における、知識人の一般的態度であつた。

こうした判断を加えながら、この膨大な資料をひもといていると、私の脳裏には、二十世紀前半までのフランス社会にみなぎっていたあの繊細にして重厚な生活の渋味が彷彿としてわいてくると共に、これらの書籍が収まっていたであろう書齋の深閑たるたたずまい、そして、全体に黄ばみがかった年代もののその壁と、同じ色調にみえる書物の背とが相まってかもし出す薄茶色の鈍重な明かるみさえもがほのかに浮かんでくるような気がするのである……。しかし、想像はここで止めなければなるまい。ともかくも、当コレクションを構成している書籍や資料(パンフレット・報告書・手書きのノート・雑誌の一部)には、パリの国立図書館 *la Bibliothèque Nationale* や国立古文書館 *les Archives Nationales* で搜しても、おいそれとは見つからないような稀覯本が含まれているので、日本にあってフランス教育史・文化史・社会史を研究する人々にとっては宝庫的な図書である、と言っても過言ではない。当論は、近

代以降のフランス教育史の推移に沿いながら当コレクションの研究文献的価値を紹介するというよりも、逆に、当文献の主なるものを洗うことによって、フランス教育史の相貌と進展を再認識してみようとするものである。

蔵書の時代別分布 当コレクションは、十六世紀出版のもの二冊（但し、合本装丁）、十七世紀のもの三六冊（合本二件）、十八世紀のもの一四六冊（合本七件）、十九世紀のもの二六七冊（合本二件）、二十世紀のもの五九冊（合本二件）、出版年度不詳のもの一冊から成っている。十九世紀のものが、総冊数、約五〇〇冊の半分以上を占めていることがわかる。（なお、同一本が数点含まれている。）

従って、これら蔵書の範囲は、印刷術の発明による活字の普及より一世紀後の十六世紀後半（フランスのルネサンス後期）から、二十世紀の中葉に渡っている。十九世紀の書物がとびぬけて数多い理由は、当蔵書の所有者（複数の代に渡るとしても）の主なる活躍期が二十世紀よりも十九世紀であることと、十九世紀が、前時代に比べて数多い教育書を生んだ時代であることである。そして後者の理由には、もう一つの重要な理由となるべき背景が存在する。それは、十九世紀という時代が、民衆の識字化の急速に進んだ時代であること、すなわち、国民教育制度の確立期に当たることである。二十世紀は、「教育爆発」*l'explosion scolaire* の時代（すべての教育階梯における進学率のめざましい上昇をマークした表現）である、あるいはさらに、七〇年代以降はこの教育充足状態から派生した頹廢現象をさして「学校教育の危機」の時代、さらにはこの現象を特定のイデオロギーのふりにかけた上で「学校教育無用」の時代であると言われることがある。⁽³⁾しかるに、「十九世紀は、まさしく学校の時代」⁽⁴⁾なのであった。十九世紀こそは、フランス革命以後百余年にわたって続いた社会的動乱のただ中において、国民全体を対象とする体系的な学校教育制度を確立する作業をやった時代であった。教育問題や教育論議を多くの領域や次元で生み出した十九世紀フランス

は、それゆえ教育史家にとっては、果てしもなく長いエポックなのである。教育関係書がおびただしく刊行された主因は、まさにこれである。当稿においてもそれゆえに、十九世紀以降を、別途に論ずることにしたい。

外国教育学との影響関係について フランスの教育は、今世紀を除き、世界教育史を代弁すると言えるほどの、普遍的な教育学的諸命題を他国に提供してきた。フランスの政治的変動や文化が他国に及ぼした影響の大きさや深さとまったく同様に、フランスの教育のありようと理論とは、特に十七世紀以来、他の西欧諸国に絶えず参照され、活用されるところとなっていた。とはいえ、フランスは他の国々の教育理論を学ばなかったわけではない。それは、当コレクションに含まれている関係図書からも具体的に窺うことができる。当コレクションには、十七世紀のコメニウス COMENIUS J. A. (1592-1670) の代表的著作の一つ、『開かれた言語の扉』(通称『語学入門』) *Janua linguarum reserata* (一六三二) の、一六六五年アムステル版をはじめとして、同じ十七世紀の末、ロンドンで出版されたジョン・ロック Locke J. (1632-1704) の『教育に関する考察』 *Some Thoughts concerning Education* (一六九三) のフランス語訳第二版 (*Nouvelles instructions pour l'éducation des enfants*, 1699) が含まれている。さらに十九世紀初頭には、フランスで最初のペスタロッチ Pestalozzi J. H. (1746-1827) 教育理論の研究書といわれるシャヴァンヌ著『ペスタロッチの初歩的教育方法についての概説』 CHAVANNES D. A., *Exposé de la méthode élémentaire de H. Pestalozzi*, Vevey, 1805 があらわれたが、その後、ジュリアン JULIEN M.-A. (1775-1848) がこの研究を受けて、イヴェルドンにおけるペスタロッチの教育活動を十年にわたって記録・報告した研究書⁵⁾を刊行し、ペスタロッチの全業績をその時代の人々に知らしめるところとなった。当書はジュリアンがものした著作の中で最も有名なものとなった。

十九世紀フランス教育界と外国教育学との関わりについては、ペスタロッチ教育学の影響の他に、二つの動向がさ
らに注目される。一つは、一八一〇年代から二〇年代にかけての、相互教授法（一般には助教法と呼ぶ。）l'enseig-
nement mutuel の導入であり、二つは、一八七〇年代以降盛んになったイギリス、アメリカ、ドイツの教育制度の
紹介ないし研究である。前者は言うまでもなく、一七九七年に、イギリスの牧師ベル Bell A. (1753-1832) が開発
し、ランカスター Lancaster J. (1778-1838) が別途に実践をはかった教授法である。これは、年長のすぐれた子
どもが他の子どもたちを教授するというシステムで、一人の教師が多数の生徒を一斉に教授するという不利な状況へ
の解決策をもたらし、産業革命の結果発生した大量の少年労働者の教育（つまりは初等教育）を促進する手段となっ
た。この方法は、生徒が互いに教えあうという観点に着目するならば、フランス語訳の字義通り、まさに「相互教授
法」なのであるが、助手的存在の年長の生徒が教師の教授活動を補佐するという観点からみるならば「Monitorial
System」という英語の原語の示すように、「助教法」ということになる。今日、意外な観点から再評価を受けている
この生徒による生徒の教授システムは、しかし実は、産業革命期のイギリスが、幼年・若年労働者の大量生産式教育
の遂行のために編み出した苦肉の策にしてかつ名案であったわけである。

フランスで一八七〇年代以降活発化した西欧諸国の教育制度の紹介は、主に公教育省自らが調査研究を進めた官庁
作業でもあるが、イギリスや新しい国たるアメリカの教育制度がマークされたということは、王党派およびキリスト
教教団による教育関与がフランスにおいてはいかに強力にして強靱であり、また政府はこれらの既成勢力に対抗し得
るだけの教育制度を確立せんとするにいかにも腐心していたか、を示すものである。近代日本における公教育の進展事
情と異なり、フランスでは、政府こそが保守的教育体系への挑戦者なのであった。

思想面における外国教育学の導入という点から、これ以後注目されるのは、十九世紀末にフランス語版のあらわれ

たスペンサー Spencer H. (1820-1903) の『教育論』 *Education*, 1859 (仏訳 *De l'Education*, Germer Baillière et Cie, 223 p.) である。しかし、ペスタロッツと同様、スペンサーの教育理論も、フランスの教育に対して決定的な影響を与えたわけではない。ところが、二十世紀に入るや、児童の本性に着眼してそこから教育を考えようとする新教育『*Education Nouvelle*』の理論を、フランスは大きく外国に負うことになった。大人の洗練された知性を軸にして子どもの教育のあり方を考えてきたフランスは、その伝統的なキリスト教的教育観や重厚にして成熟した知的文化観のゆえに、モンテーニ^{ニテ} Montaigne Michel Eyquem de (1533-1592) やルソー Rousseau Jean-Jacques (1712-1778) という新教育理論の先駆者を輩出させた国であるにもかかわらず、子どもを起点にして人間の成長を考える教育学的転回に遅れをとったのである。

デューイ Dewey J. (1859-1952) の児童観が紹介され⁽⁸⁾、イタリアのモンテッソーリ Montessori M. (1870-1952) の教育方法が注目され⁽⁹⁾、スイスのフェリエール Ferrière A. (1879-1960)⁽¹⁰⁾ やクラパレード Claparède E. (1873-1940)⁽¹¹⁾ の著作が読まれ、ベルギーのデックロリ Decroly O. (1871-1932) の教育実践が共感と衝撃をもって受け入れられた。二十世紀前半は、新教育理論が花咲いた時期であるが、フランスはこの期、主としてベルギー、スイス、イタリアそしてアメリカの新思想を移入し、第二次世界大戦直後から飛躍的に進歩した実験心理学と発達心理学に基づくフランス独自の新教育理論の飛翔に、静かに備えをなしたのであった。

かくのごとく、二十世紀フランスの教育は、フランスの政治と同様に、十七、十八あるいは十九世紀の一時期のごとくフランスを世界のリーダーにとどめおくに足るだけの指導性を保持するものではなくなった。今や、ヨーロッパのみならずアジア、アフリカそして南米をも加えた国際的相互依存関係の中で、フランスの教育理論やフランスの学制度は刷新され続けている。そして、この事態はまた、どこの国に關してであれ共通して認められる。しかしなが

ら、この事態は、フランスの伝統的な教育に固有の、あの知的洗練さと豊饒さとを無為にするものではない。近世以来、連綿と引き継がれ発展してきたフランス人の教養観を特徴づける諸相貌や諸相剋は、人間の形成とは何かという問題に対する奥行き深い認識を可能ならしめてきたのであり、それゆえ、今日、時代を先取りするかのような奇抜な思想が生まれても、なおかつその思想は連綿と受け継がれてきた方法^{メソッド}を当然の前提としているのである。自国の文化に対する無意識的な自信と誇りは、伝統的教育という揺るがぬ母体の賜である、と考えられないであらうか。

キリスト教文化、宮廷文化、貴族文化、ブルジョア文化、あるいはエリート文化と緊密な関係にあるかつての教育は、従って単に過去の遺物としてとどまるものではない。それは重層的特徴をもつフランス文化の源流としてとらえられることが可能である。これゆえにまた、外国の教育学は、フランスの教育や教育学を根本的に変化させることはなかったのであり、それは、主に対する従の関係にとどまる、と考えてよいと思われる。

以下、コレクションに収められている文献を主なる典拠としながら、フランスの教育が各時代ごとに抱えてきた問題を確認しつつ、フランス文化それ自体の重層性に触れてゆきたいと思う。

十六世紀 当コレクション中、最も古いものは、一五六九年にヴェニス^{ヴェニス}のドゥ・ファリス^{ドゥ・ファリス} De Farris 社から出版された『学問方法論』*Methodus ac de ratione studentis*, 136 p. (著者不詳)である。当書は、フランスではパリ大学に次いでその創立が古く、当時、法律を学ぶ学生を集めて名のあったトゥールーズ大学の学生を対象にして書かれたもののようである。法学研究上のカリキュラムや方法が記されているが、道徳的心がまえについての論述のほうに、むしろ力点がおかれている。法律を学ぶ者は、「あらゆる心の迷いや憂さを忘れ、全力を挙げて渾身、研究に没入し、いかなる矛盾をも洞見し切って真理を発見すべし」、と記されている。ラテン語で書かれていることの時代性はい

までもないが、早くから教権を離れて国王権力に帰属していた法学部の学生たちの世俗的享樂ぶりを戒めている文章とも受けとれる。十六世紀中葉の、大学生ガイドブックとでもいふべきものである。

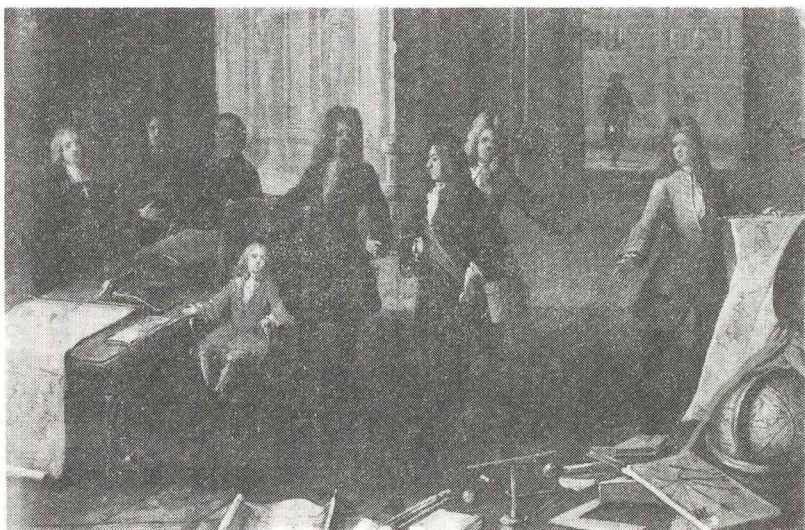
『ヘセー(随想録)』*Essais*の著者にして、フランスの偉大なるモラリスト、モンテーニュは、ボルドー市にある名門校、ギューエンヌ学院 Collège de Guyenne を十三歳で卒業してから、二十一歳で司法職に就くまでの間、このトゥールーズ大学でしばしの間、法律を学んだのではないかと推測されている。もしそうであるとすれば、その年月は一五五二～三年ごろに相当するので、当ガイドブック出版時から十六・七年前に当たることになる。モンテーニュは、この『学問方法論』にみられる以上に堅い教訓を馬耳東風と聞き流しながら、事実、青年期のひとときをここで過ごしたのかも知れない。

フランス教育史の観点から、十六世紀の後半について特記されるべきことは、地方大学の創設(ランヌその他)、イエズス会のめざましい教育界進出⁽¹³⁾、母国語たるフランス語の文語使用の普及である⁽¹⁴⁾が、これらの事実から成る新しい潮流は、中世の尾を引く旧来の教育の諸相を飲みこみつつ、十七世紀へと流れ込んでゆくのである。

十七世紀 血なまぐさい殺戮をくり返した宗教戦争 les Guerres de Religion も、王位争奪争いの果てにアンリ四世が即位して終結へと向かった。ナントの勅令 Edit de Nantes (一五九八) が公布されるや、フランスは内乱状態を脱してブルボン王朝の基礎堅めの時期に入るのである。絶対王制確立期へ向かうこの時代はまた、教団勢力の興隆と伸展の時代でもある。教育史の上で先ず目を引くのは、師傳 précepteur (高位の家庭で子ども教育全般を担当した人)を務めた人物や学問を積んだ人物の書いた王子(または世子)教育論⁽¹⁵⁾が前時代以上にあらわれるようになったことであるが、王子のみならず若き主君に対する望ましい教育のあり方を説いた貴紳教育論⁽¹⁶⁾、高位にある人物が我が子

や、友人の息子たちの教育について書き送った教育的助言ないし人生訓(註)（広い意味では貴紳教育論に入る）も数多くあらわされた。これらは一つの類型としてまとめよいと思われる。十七世紀末にロンドンで出版されたロック著『教育に関する考察』（既述）は、この最後の範疇に入るものである。一八四四年までに二十版を重ね、王子教育論の中では第一級の名著と評価される著作は、クロード・フルーリィ Fleury Claude (1640-1723) の『学習の選択と方法についての論述』*Traité du choix et de la méthode des études*, Aubouin/Emery/Clousier, 1686 である。王子教育論に余り関心のない日本の教育学者にはほとんど無視されているフルーリィは、司祭にして作家、そして高等法院の弁護士を務めた。同じ時代に、ルイ十五世 Louis XV (1710-1774) の師傳を務めた、後の枢機卿、フルーリィ Fleury André Hercule de (1653-1743) とは区別されなければならぬ。一六七二年からコンティ王家 Maison de Conti の王子たちの師傳となり、次いでルイ十四世 Louis XIV (1638-1715) の子どもでもあるヴェルマンドウワ公 Comte de Vermandois の教育にあたった。『学習の選択と方法についての論述』は、コンティ王家で師傳を務めていた一六七五年から執筆され、八六年によく公刊された。イタリア語、スペイン語、ドイツ語に訳されて版を重ね、長きにわたってヨーロッパにおける世子教育の指南書となったといわれる。彼は、フェヌロン（後述）とも親しかった。十八世紀のルソーが説いた、子どもがもっている自然のままの興味を引き出し覚醒させるという教育の原理は、既にこの書において強調されている。以上の事実は、ヨーロッパの教育論の起源と根幹が、王子教育論に存するということを、改めて我々に認識させてくれる。本書の初版本が、当コレクションに収められていることは貴重である。

十七世紀に顕著な、第二の類型ともいべき教育論は、カテキズム（教理問答書）(註)を含めて、各教団から出された学習論（言語、修辭学や論理学の学び方）やモラル論である。十六世紀の宗教改革の嵐が静まらぬうちに、既に反宗教改



革の動きは活発化していたが、十七世紀フランスは、まさに
 カトリック勢力の新興時代とも言えるほど、各教団の躍動に
 満ちあふれていた。十六世紀前半に結成されたイエズス会の
 積極的な学校設立活動はもとより、一六一一年には、ベリ
 ール Bérulle P. de (1575-1629) がフランス・オラトリオ
 会を創建し、コレージュを設立していった。一方、ポール・
 ロワイヤルを拠点として熱烈な神学活動を開始し始めたヤン
 セニスト達は、教育活動に熱心であり、とりわけ「小さな学
 校」と呼ばれる初等教育機関を設立（一六四〇）して、フラン
 ス語の教材による宗教・言語教育を行った。さらに、ラ・サ
 ール La Salle J. Baptiste de (1651-1719) による「キリス
 ト教学校同胞団」（別称、「キリスト教職会」Les Frères des
 Ecoles Chrétiennes の設立（一六八二）と初等教育の普及
 活動も見のがすことができない。これ以後、キリスト教学校
 同胞団は、教育事業において、イエズス会におとらぬ活躍を
 してゆくことになる。もとより、王子教育や貴紳教育の中心
 は宗教におかれていたのであった。当コレクシジョンには、フ
 ランシスコ・サッキノ Sacchino F. (1570-1625)（ローマ

イエズス会教団の修辭学教授)によって書かれたイエズス会学校の教師向け指導書が含まれているが、これは、十八世紀中葉までに全ヨーロッパで六〇〇を越えるに至った当会の学校で活用されたという。この事例一つによっても、イエズス会の隆盛ふりと、この会の体系的で一貫した教育体系への樹立の努力とを知ることができる。

ところで、日の出の勢いとも言えるイエズス会は、既に一六四〇年代から、ヤンセン派の説く恩寵論について、これを異端であると攻撃していた。パスカル Pascal B. (1623-1662) を渦中に巻き込んだ、恩寵と自由意思の関係に関するヤンセニストとジェズイットの神学論争は、パリ大学神学部と国王ルイ十四世を味方にしたジェズイット側の政略的な勝利に終わった。ヤンセニストに対する弾圧は厳しくなり、ポール・ロワイヤルの「小さな学校」も一六六一年には閉鎖を命じられた。興味深いことに、ポール・ロワイヤルの代表的な神学者・教師たちの活動は、六二年に世を去ったパスカルを除き、禁圧以後に教育の領域で活発化している。彼等の神学的解釈

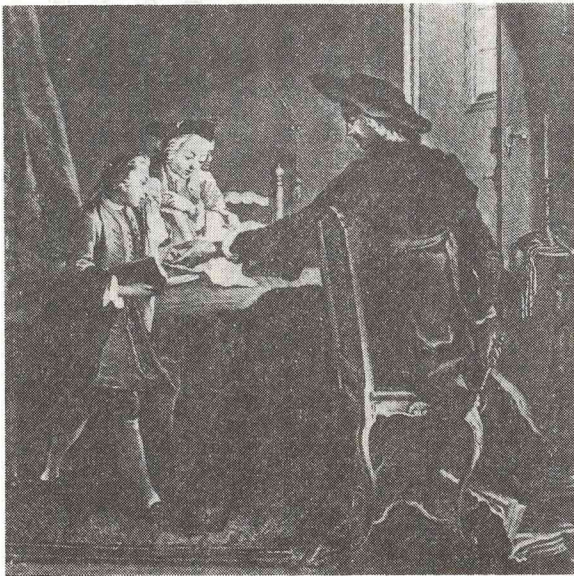
近代フランスにおける教育の諸相と展開

写真1 (前頁上) 王子の教育

師傳 FLEURY (A. H. de) (左端) から教育を受けている幼年時代のルイ十五世。数多くの重臣、貴族、聖職者が同席し、それは極めて大げさなものであった。前方に、地球儀、コンパスなど。当時としては稀な教材が揃えられている。出典、注(4)

写真2 (左) 貴族の子どもと家庭教師

当時のこれら私教師たちは、貴族の館に住み込み、生活全般にわたって子どもを指導し、その人格形成に重要な影響を及ぼした。右手に、子どもを叱る際に用いた木製の笞を握っている。出典、同右



は弾圧されたが、彼等の論理学、言語教授論や教育論は、その後の世紀にわたって多くの人々の共鳴をよび普及をみているのである。なお、オラトリオ会はヤンセン派に好意的で、この派の子弟たちを自らのコレージュに進んで迎い入れた。ヤンセン派の指導的な神学者・教師として先ず挙げられるのは、哲学者としても高名なアントワニス・アルノー Arnaud A. (1612-1694) と「ニコール・ニコル Nicole P. (1625-1695)」、ピエール・クステル Coustrel P. (1621-1704)、「クロード・ランスロー Lancelot Cl. (1615-1695)」の四人である。十七世紀中の文献としては、クステルによる、児童の教育に関する所見が注目される。これは、ポール・ロワイヤルの「小さな学校」の教育精神を解説している貴重な文献である。貴重という点でさらに注目されるのが、アルノーとニコルの共著になる『論理学、すなわち思考することの技術。共通せる諸規則の他に、判断力の形成に関して新たに観察されし幾多の原理』*La logique ou l'art de penser : contenant, outre les règles communes, plusieurs observations nouvelles propres à former le jugement*, Charles Savreux, 1662, 473 p. である。当書は通常、『ポール・ロワイヤルの論理学』と題されている書物で、ソルボンヌ神学部が嫌っていたデカルト哲学の方法論によって書かれているとみられている古典的名著である。今日もなお尊重されている当書の初版本が、コレクションに入っている点は驚きである。さらにこの他、十八世紀前半まで版を重ねて読み継がれた、彼等の手になるフランス語、ギリシャ語、ラテン語教授法の文献が四点含まれている。

さて、王子教育論、キリスト教教団の教育統轄に次いで、第三に注目すべきは、言語の教育に関する文献である。ラテン語に対する母国語の登場については前に述べたが、学校教育からラテン語が消えたわけではなく、ラテン語文法を正しくマスターすることは、十七世紀においても、学校教育や人間形成の最大の眼目であった。いなむしろ、俗語が登場したために、一層力が注がれるようになったのである。しかし、前時代には余りみられなかったたぐいの書

物が出廻るようになった。一つは、ラテン語を使つてのフランス語入門書、つまり、「ラテン語―フランス語自由自在」とでも名づけたような本の登場である。⁽²¹⁾すなわち、十六世紀には学校教師によつてうとましく思われていた母国語が、いかに正しく容易に学ばれるべきかが、考えられ始めたのである。二つは、他の国々の国語を学ぶための入門書⁽²²⁾があらわれ出したことである。この二つの傾向は、十七世紀が、ローマ教会の普遍的言語から、国民の生活を反映している俗語に、言語教育の重点を移行させつつある時代であることを証明している。十八世紀になるや、国家権力の強大化ゆえにますます堅められてゆくこの母国語主義は、ガリカニズムと一体になり、いつしか教会を離れた宇宙観や社会観を醸成してゆく遠因となるのである。ともあれ、ラテン語と母国語を並列化し、両者の間に合理的な連関を打ち立てようとしたこの時代の意図は、コメニウスの『開かれた言語の扉』(既出)に最も典型的に反映している。

最後に触れておくべき点は、これもやはり十八世紀により大きな開花をみるに至った女子教育論の登場である。一つは、王子教育論に匹敵する王女教育論であるが、内容は優雅な振るまい、高貴な身分にある女性として持すにふさわしい道徳性などが中心テーマをなしている。もとより、信仰についての教えはその根底をなしている。これは、十七世紀以降の貴族の子女教育の原型となつてゆくのである。さらに前進的な女子教育論は、マントノン夫人 MAIN-
TENON, Madame de (1635-1719) が自らの教育実践において示した見解である。ルイ十四世の愛妾にして王后亡きあと王と結婚したとみなされている彼女は、一六八六年にサン・シールに女子教育所 Maison Royale de Saint-Cyr を設立し、恵まれない没落貴族の娘たちや、親に先立たれて困窮状態にあった貴族の娘たち(六歳以上)を当教育所に預かり、彼女等が二十歳になるまで教育の任に当たった。三十年以上にわたつて続けられた彼女の事業は、まさにこの娘たちの境遇と同様であつた自らの少女時代の不遇さに対する補完的行為でもあつた。サン・シールの教育方針は、良妻賢母の育成にあり、裁縫・刺繍・織物などのいわば手工芸が主なカリキュラム内容であつた。この点におい

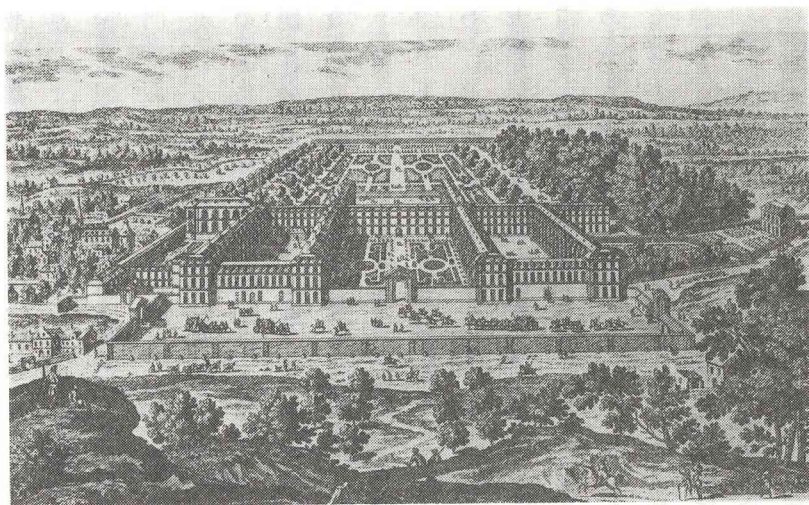


写真3 マントノン夫人によって設立された(1686)サン・シールの女子教育所全景。出典、注(25)

て、それは、特に近代的な視点に立った教育実践であるとは言いがたいものではあるが、ただし、その教育方針の理念に、当時、教育論者として高名であったフェヌロン FÉNELON F. (1651-1715) の女子教育に対する見解が反映されているという点において注目されている。この意味において、マントノン夫人が運営し自ら直接教育指導を行っていたサン・シールの女学校は、フェヌロンの教育理論の実践校ともみられる。さらに、この学校の意義は、当時まだ修道尼院的な発想から行われていた教育を廃し、宗教的責務に束縛されない世俗的性格の強い女子集団教育の場であったという点にある。夫人のうしろにはルイ十四世がついていたのであるから、見方によれば、国の経営した女学校ということにもなる。

当コレクシヨンには、サン・シール学校での生活の規則が記された手書きの小冊子²³が含まれているが、これは娘たちが夏のバカンスなどを終えて学校へ戻ってきたときに手渡された学則書の一つである。鑑定家によって付されている説明によれば、マントノン夫人自らの手稿で、世界にも稀な貴重資料であるということである。彼女の書簡、原稿、あるいは彼

女の説話にみられた格言金言などが筆写された諸資料は、今日、フランスの多くの図書館や個人宅の書斎の奥深くにしまい込まれたまま散逸状態にあるといわれ、そのために全集刊行もいまだに難しいそうであるが、当コレクシオンには、こうした貴重資料に当たる第一級の文献が、他に四点含まれている。²⁴ マントノン夫人をフランスにおける最初の女流教育家として位置づける本格的な研究が近年あらわれたことから、今後は、彼女の教育観に對する史的考察が深まってゆくことであろう。この時代以降、すぐれた教育論が女性によって書かれることが少なくなくなるが、その仕事のスケールからして、フランスにおける第一級の女流教育家は、おそらくこのマントノン夫人と、十八世紀後半から十九世紀初頭に活躍したジョーリス夫人²⁵ GENLIS, Madame de (1746-1830) ではないだろうか。

最後に、フェヌロンの女子教育論に触れておきたい。聖職者フェヌロンは、ボーヴィリエ公 Duc de Beauvillier (1610-1687) の息女たちの教育を担当した後、公の推輓をうけて、後にブルゴーニュ公 Duc de Bourgogne となったルイ十四世の孫 (1682-1712) の師傅となり、乱暴者だったこの王子をしてすばらしい人物に育て上げた。その際、前者の教育経験の産物として『女子教育論』*De l'éducation des filles* (一六八七) が、後者の教育経験の産物として『テレマックの冒険』*Les aventures de Télémaque* (一六九九) が生まれたのである。²⁷ この二著によって、フェヌロンは女子教育論者、幼児教育論者としての名望を得てゆくのであるが、彼の著作には、一般の王子教育論や、貴族の子女の教育を論じた諸見解によくみられる表面的な人間理解を越えた普遍的な観察と考察の目が光っており、また、聖職者という職務から派生し易い限定的な視界とは無縁な、自然主義的な児童観の萌芽がある。この点において、フェヌロンの教育論は、マントノン夫人をはじめとして、『母から娘への忠告』、『若き令嬢についての手紙』の著者であるランベール夫人²⁸ LANBERT, Marquise de (1647-1733) といった当時の錚々たる女性に影響を与えたばかりでな

く、その調和のとれた人間形成論は、ポール・ロアイヤルの指導者アーノルドの精神に生涯忠実であった古代史家シャルル・ローラン^図 Rollin C. (1661-1741) (一六九四—九六年、一七二〇年パリ大学総長) のような高潔な碩学にも影響を与えたのであった。

さて、以上の叙述を通して確認させられるのは、十七世紀までのフランスの教育論には、種々の相違を越えた上での共通項を認めることができる、という点である。それは、先ずキリスト教的要素と何らかの形で結びついていることであり、次いで、人間における道徳性の涵養を強く求めていることであり、第三に、ラテン語に重きを置く言語への誘い^{いざな}をも含めた意味での文学的教養を基幹にしているということである。続く十八世紀は、これら宗教・道徳・文学的教育観の上に、いくつかの動態的な変化が導入されてくる時代であり、その傾向は、十八世紀の後半になればなる程、おもて立ってくる。

十八世紀 そのような世紀的変貌の兆し、換言するならば、フランス人の教育観が重層性を強めてゆく徴候は、一七六〇年を一つの時代的な区切りとして考察することにより明確化する。おそらく、社会思想史の上では、ヴォルテール Voltaire F.-M. Arouet (1694-1778) モンテスキュー Montesquieu Ch. de Secondat (1689-1755) の著作活動、あるいは『百科全書』 *Encyclopédie* の刊行 (一六五二—一六七二) をかんがみて、一七五〇年を、いな一七四〇年を転機とみなすのがより妥当であらうけれども、教育は本質的に伝統と慣習を背負ったまま続行され易い、がゆえに、社会進歩の歩調から常に一步遅れるのである。宗教性に対する世俗性の抬頭、道徳性に対する知性の強調とそれへの信頼、文学に対する科学の信仰が、十八世紀に現出した時代的变化を説明する。これらの変化はしかし、重層性という言葉を使って強調しているように、両極分解的なかたちで認められるわけではなく、否定しようとするその対

極をとり込んだ上での、弁証法的發展の中に生成するのである。これこそが、フランスにおける教育の展開を特徴づけている相貌であり、また同時に、近代日本にみる教育の發展過程との根本的な相違である。それゆえ、特に教育あるいは教養の領域においては、フランス人は伝統の良さを保持しこれを安易に葬ることはない。

教育関係の文献を洗う限り、フランスは一七五〇年代の終り頃までは十七世紀の延長線上にあると判断される。王子教育論が輩出し、イエズス会やこれに対抗していたオラトリア会をはじめとする諸教団の教育活動は初等教育・中等教育の大部分を占め、キリスト教的な散漫な宗教心と文学的教養を二大支柱とする女子教育論が人々の共感と賞讃を集め、青少年教育のウェートはまだカテキズムと語学教育を通しての道徳性の育成に置かれていた。

しかしながら、徐々にではあるが、教育内容と実生活との遊離が意識され始めていた。経済的・社会的變動のなかであって、貴族階級やブルジョアジーに属する知識人は、理性に基づく識見を養う自然科学的内容を欠いた教育のあり方に批判の眼を向け始め、一般民衆あるいは農民は、彼等に与えられる初等教育が、一人立ちするに足る腕をみがいてくれる実的内容とは無縁のものであることにもどかしさを覚えていた。ところで、教団が設立したコレージュは、本来、身分の差別なく万民に開かれていた。つまり、子どもの属する階級が何であらうとも、同一の仕方で、同一の教育を授けたのである。コレージュはそれゆえに、或る意味では、機会均等の原理に立った教育機関であった。十七世紀のはじめ、コレージュはフランス全土で約八万名の児童・生徒を収容して隆盛であったといわれる。しかし、十八世紀後半に至る頃には、貴族階級の子弟はコレージュを見棄てて家庭教師についていたし、この教育機関はむしろ、新興ブルジョアジーや職人・農民階級の子どもたちが立身出世をねらいとして通う機関として機能していた。しかるに、コレージュが与えるのは、一貫して、宗教教育と言語教育（ギリシャ語、ラテン語、フランス語の読み・書きのマスター）であった。常に教団の教育原理は、「神を救う心と、良俗と、人文主義的文学へと青少年を高め上げ

る」ものでなければならなかった。一方、時代は、このよう
なローマ教会の「立法」に忠実にとどまるには余りにも遠く
離反しつつある方向に進んでいたのである。ダランベール
D'ALEMBERT J. (1717-1783) は、『百科全書』の「コレージュ」
の項目の中で、コレージュに十年学べば完全に時代にと
り残された人間になり下がる、という批判を加えている。

まさにこの状況下、教育改革の口火は二つの方向から切ら
れた。一つは、ラ・シャロtte La Chalotais L.-S. (1701
-1783) が中心となって断行せしめたイエズス会追放事件であ
り、二つは、ルソーの『エミール』Emile の出版である。前
者は、フランスの初等・中等教育に勢力をはっていた大教団
を追放し、「国家による国家のための国民的教育」を確立す
るという意図に立った、体制面での教育革命であった。後者
は、子どもの本性を否定的にみてこれを早く矯正しようとし、
教会や大人の命令に服従するだけの形式にはまりきった子ど
もをつくる教育に対する、すなわち多くの人為的・虚偽的な
工夫をこらすアンシャン・レژیーム下の教育に対する、理念
的そして方法論的反乱であった。この二つの教育史上の乱気



写真4 イエズス会追放事件 (1762)

左手に、罵声の中を追われるようにして立ち去るイエズス会員の神父たちが描かれている。出典、注(4)

流が、一七六二年に同時に生じたことは、決して偶然ではなかったのである。もちろん、ラ・シャロッテに対する批判的見解が、特にイエズス会員たちから出されなかったわけではない。³⁷⁾ また、イエズス会の業績を弁護する意見も出された。³⁸⁾ しかし、時流は変えられなかった。以後、堰を切ったように、国民教育論、市民教育論、民衆教育論が噴出し、ローマ教会の指示から脱した世俗的な教育体系の樹立、ならびに実学的な教育内容の供給が要求されるようになった。フランス革命(1789-1795、ここでは総裁政府(1795-1799)期間を除外する)は、立法議会 *Assemblée législative* (1791. 10. 1-1792. 9. 20) そして国民公会 *Convention Nationale* (1792. 9. 21-1795. 10. 26) を通じて、教育史上重要な国民教育改革案を生ませたが、それらの計画案に示された主張点は、以上に触れた歴史的な潮流と呼応しているのであり、つまりはそれらを代弁しているのである。

『エミール』は、教育思想史上、自然主義とりわけ浪漫主義的自然主義に立つ教育論にして、かつ現代教育思想の源流とみられているが、そこでルソーが陳述した理想の教育は、しかるに科学主義的自然主義に立つ多くの啓蒙思想家たちの冷笑をかうことが少なくなかった。ルソーの人間形成論は、徳性涵養論つまり望ましい道德性の涵養を唱導する理論であって、それは同時代の啓蒙思想家の大半が信奉していた知的理性の涵養論とは、そもそも発想を異にしているのである。前者は文明よりも自然を規範とし、後者は自然状態よりも科学的認識を基とした合理的な文明社会に人間の価値を託している。ルソーは、或る意味では、十八世紀フランスをしてアンシャン・レジームから飛翔させるに力あった思想家であるが、また或る意味では、時代に早すぎた人であり、その教育論の正当な評価と賞味は、二十世紀の到来を待たなければならなかった、と言えよう。

従って、『エミール』出版後のフランス社会および教育界は、ラ・シャロッテが『国民教育論』*Essai d'éducation nationale, ou plan d'études pour la jeunesse*、と題する覚書きで提起した(一七六三)問題、すなわち「公教育

をめぐる諸課題への関心で占められたのであった。もちろん、ルソーの主張とこれら諸課題とは、関連しないこともない。しかし、ルソーはこの時期、むしろ彼の政治思想によって時の主人公となったと読むほうが無難ではあるまいか。付言するならば、ルソーの『エミール』は、内容的にその範疇を越えているとはいえず、執筆のきっかけからしても貴紳教育論なのである。これに対して、明敏な司法官、ラ・シャロットの発想は、国家権力と教会権力の対立という現実的かつ緊急の課題から出ていたのであり、人間性の探究という問題は、これに後続するテーマでしかない状況に時局はあった。

十八世紀の六〇年代から革命をはさんだ世紀末まで、この高波の潮流に乗って続々とあらわれ出たパンフレットや出版物に展開されている提案・報告・勸告・主張は、総括して、(傳育官や家庭教師による私教育あるいは教団による教育とは別種の新しい教育についての論述、すなわち)公教育論の類型に入るものである。当コレクションに収録されている文献を検討しても再確認できるが、それらは大体五つの領域に分類される。ただし、当然ながら、複数の領域にわたるテーマを論じている文献もある。また、五つの領域は、相互に関連し合って同一の方向をめざしている点は強調されなければならない。それら領域の第一は、コレージュ改革を含めた上で、現実の社会の動きに適応した、国民のための学校教育体系のあり方を考究し報告している、いわば制度論であり、第二は、王侯・貴族・僧侶に代わって抬頭してきた市民階級(ある意味では国民)のための教育原理論であり、第三は、市民階級からもとり残されて、貧困のうちに生きている民衆に対する啓蒙主義の見解、第四は、これまでとは全く異なった要請が託されている女子教育論であり、第五は、新しい学校教育のカリキュラム論である。これら五領域にみられる諸主張はすべて、先述した十八世紀後半の教育がもつ三つの特徴、すなわち、世俗性、知力、科学への志向性と連動していることは言うまでもない。

当コレクシオンには、一の公教育制度論に該当するものとして、フランス革命前に出版された公教育論が数点含まれているのみならず、革命初期における過渡的な国民教育論者として知られるミラボー Mirabeau G. (1749-1791) の公教育論稿二点(うち一点は、ミラボーの親友カベニス Cabanis P. J. G. (1757-1808) が遺稿を出版したもの)が収録されている(共に初版稀観本)。さらに、タレーラン Talleyrand Ch. (1754-1838) の『公教育報告』(初版稀観本)、『コンドルセ Condorcet M. J. A. N. (1743-1794) の『公教育の一般組織に関する報告および法案』(立法議会上の一七九二年、コンドルセが公教育委員会に自らの草稿をはかり、二ヶ月半にわたって審議を尽くし最終的な作成をみたものだが、政変により法案化に至らなかった)、公教育委員会のメンバーでもあったラントウナス Lantzenas F. (1740-1799) の公教育論もそろっている。立法議会上に作成された、以上のジロンド党員の公教育論に加えて、当コレクシオンには、ジャコバン党員的首領ロベスピエールによって国民公会に提出された(一七九三)ル・ペルティエ Le Peletier M. (1760-1793) の国民教育案⁽⁴³⁾、より過激な革命路線をひくエベール派のブルドン Bourdon L. (1758-1815) が書いた教育計画案⁽⁴⁴⁾(初版稀観本)、そしてフランス革命中、最もラディカルな試行であったと言われる軍官学校 l'École de Mars の創設(一七九四)に先立ち、青少年の革命意識への洗脳教育と軍隊教育組織化の必要性に関する提議を行った、革命末期のテロリスト的政治家バレール Barrère B. (1755-1841) の報告書⁽⁴⁵⁾(初版稀観本)さえまでが収録されている。主知主義から訓練主義へと移行するフランス革命期の公教育論にみられる内容的変化を追ってゆくならば、革命それ自体の、テロとミリタリズムへの傾斜が手にとるように理解される。公教育論者の主張を並べ比較してみると、コンドルセの計画案は、いかにその視野が広く、時局的関心にとらわれることが少なかったか、そして、いかに多くの普遍的な教育原理を包括し、総合していたか、が改めて理解される。今日もなお、公教育の原理が彼の報告書に求められるゆえんである。いずれにしても、革命期の議会文書まで含んでいる当コレクシオンは、社会思想の研究

上も貴重な資料庫といえる。

第二の、市民教育論に関しては、以上の公教育諸論は当然の文献として、他に約十点ほどの貴重な第一次資料（一七五～一七九三年までの出版物）が収録されている。両者をつき合わせて、主張点をまとめるならば、①宗教色の排除、②国民意識・愛国心の形成、③母国語たるフランス語の重視、④身体的訓練・体育の導入、⑤共和国市民に与えるにふさわしい新しいライックな道德教育（＝市民教育）の提唱などである。まさしく今日の我々が享受している教育の誕生がここにある。だが、ここでもまた、革命末期になるにつれて、「フランス精神」の名の下に、体育・軍事教練の性格の強い教育要求が先行し、もはや、ヴォルテールやデイドロ、ラ・シャロツテの理性的啓蒙思想とは別物の高揚した感情的論旨が表立っていることに気づかせられる。第三の民衆教育への顧慮とは、小冊子の発行などによって、百姓、召使、職人といった、当時極貧状態におかれた人々に対する教化行動を、聖職者以外の人々もとり始めたことである。こうした動きは、革命前からみうけられた。次に、第四の、女子教育観の変化であるが、それまで理想とされていた女性像、すなわち、しとやかで貞淑で宗教心にあふれた女性というイメージは、啓蒙思想の浸透および革命の進行と共に不十分なものとみなされるようになった。女性の特異性をどの程度考慮に入れるかについては、論者によって相違はあるが、女性にもまた、共和国市民として生きる姿勢が求められ、男性のように知的認識力をもつことが、両性平等の原理（コンドルセなど）に基づいて主張されたのである。コンドルセおよびル・ペルティエにおける男女共学の原理はその嚆矢である。革命末期には、当然、軍国主義的賢母を養成するというスパルタ流の女子教育論が唱えられたが、それはさておき、革命前の時点で既に、女子の身体教育と道德教育の均衡の観点から体育の必要性が説かれ、また両性の平等論があらわれ、科学・芸術・行動の領野で卓越した先人を語る烈婦略伝が書かれたということ⁽⁴⁶⁾は、啓蒙思想が女性観にも浸透し反映していた事実を物語るものである。最後に、カリキュラム面での

新しい動向であるが、その一つは科学的教科の強調に、二つは実学的教科の懇望に如実にあらわれている。前者は特に六〇年以降輩出した教科書を検討することによって知れるが、地理学（これは十七世紀から好んで学ばれていたが）、物理学、天文学、博物学等の理数系教科書が盛んに執筆され出版されるようになった。⁽⁴⁹⁾ 高等教育においては医学の進歩が顕著であった。こうした科学と教育の結合を立証する状況は、宗教と教育の結合が絶対的であった十八世紀中葉までの教育状況と対置させてみると、近代フランスの実証主義・経験主義の脈動を伝えてやまない。ところで見落せないのは、これらの理数系科目が、主として市民・町民以上の階級、すなわちブルジョアジーの子弟を対象として要望されたという点である。フランス革命は、階級差を払拭したわけではない。当コレクシヨンの資料もリアルに物語っているように、これ以下の民衆の子弟に対しては、工芸・手職・実務といった、職業人や下級労働者に必須の実用的技術を教える科目が、組まれるべきであると主張され始め、さらに民衆自身もカテキズムを中心とする時代遅れの教育に不満をもち、そうした科目を要求し出したのである。特にイエズス会追放後にあらわれた地方自治体経営のコレージュ Collège municipal を中心に、経験的性格の強い職能的教科の設定が、緊要であると考えられるようになった。⁽⁵⁰⁾ このようにして、十八世紀後半のフランスの教育は、現実社会の変化とその要請に無関係ではあり得なくなり、また、教育こそ社会の不平等を解消し人々を理性に導く手段であるという確信がゆきわたってゆくのである。ウルトラ・モンタニズムの人間形成から、ナシヨナリズムを基軸にした近代市民社会の形成という社会的機能へと、教育の性質はいつしか徐々に変貌をとげてゆく。だがこの新しい動きの中にあって、オラトリオ会のみは革命期間中も教育活動を禁圧されることなく、キリスト教の教えと国家主義と科学主義を融和させた教育を推進させていった事實は、十八世紀フランスの教育の相貌もまた、複眼的にとらえられなければならないことを示唆するものである。

「教育は、教会と共に行われるのか、教会によって行われるのか、あるいは教会に対立してという意味において教会の外で行われるのか」という西欧教育の本領をなす問いこそ、十八世紀の後半に生じ、十九世紀を悩まし続けた課題である。断絶性ではなく連続性を特徴とする近代教育の一つのモデルがここにある。このモデルの展開過程に明瞭に読みとれるのは、過去の文化がもつ普遍的価値についてはこれを放棄することもなく深い自己変革をとげているフランス文化である。しかし今や確かに、世俗化の進行、教育の普及、児童観の変化⁶³から目をそらすことは不可能である。これらのテーマのさらなる展開の様相については、十九世紀を待たなければならない。

【注】

- (1) 拙論「現代フランス教育学研究の動向と展望」、『教育哲学研究』教育哲学会紀要二九号、一九七四年、所載）を参照。
- (2) 拙論「学校における道徳教育—フランスにおける教育世俗化の問題を中心に—」、『現代教育問題史』（明玄書房・一九七九年）所載）を参照。
- (3) その最も先鋭な理論の一つは、イリッチの脱学校論である。ILICH I., *Deschooling Society*, Harper & Row, 1970（邦訳・東洋・小澤周二訳『脱学校の社会』、東京創元社・一九七七）アメリカやフランスには、特に七十年代以降、これに共鳴する強力な思想グループがあらわれた。
- (4) MAYEUR F., *Histoire générale de L'Enseignement et de l'Education en France*, Tome III, Nouvelle Librairie de France, 1981, p. 12 in 630 p.
- (5) JULIEN M.-A., *Exposé de Méthode d'Education de Pestalozzi, telle qu'elle a été suivie et pratiquée sous la*

direction pendant dix années (de 1806 à 1816) dans l'Institut d'Yverdun, en Suisse, 2^e éd. Hachette 1842（当コレクション収録）。さらに当コレクションには、ジェリマンの初期のベストロッツ研究書も含まれている。

JULIEN M.-A., *Esprit de la Méthode d'Education de Pestalozzi, suivie et pratiquée dans l'Institut d'Education d'Yverdun, en Suisse*, Milan, 1812.

(6) HAMEL J., (Traduit de l'allemand de HAMEL J.) *L'Enseignement mutuel, ou histoire de l'introduction et de la propagation de cette méthode par les soins du Dr. Bell, de J. Lancaster et d'autres*, L. Colas, 1818, 228 p. ; BALY, *Guide de l'enseignement mutuel*, L. Colas, 1818, 328 p. ; *Disposition d'une salle d'enseignement mutuel qui peut contenir 130 élèves*（著者不詳の手書き原稿三枚で、当時フランスで実践された助教法方式の教授方法を見聞して記したもの）： *Aux détracteurs de l'Enseignement*

Mutuel; Réponse à l'écrit de M. Robert de La Mennais ... sur l'Enseignement Mutuel; Lettres à M. le Rédacteur du Journal d'Education (以上の三篇はペンファットの小冊子が一冊本として装丁されたもので、一八一九年頃のものである。): Société pour la propagation de l'Enseignement Mutuel dans l'Aube, Séance générale du 6 Mars 1836, 32 p. (同じくペンファットの小冊子で、一九三〇年代の中頃には、助教法がフランスの地方に普及していった事実を示す興味深い資料である。): 並びに興味深い資料としては、ランカスター式教授法をとる学校と、一六八四年にラ・サールによって創立されて以来、フランスのキリスト教学校の代表モデルとなった「キリスト教学校同胞会」の学校とを比較検討した文献がある。DUBOIS-BERGERON P., Des nouvelles écoles à la Lancaster, comparées avec l'enseignement des Frères des Ecoles Chrétiennes, légalement établis depuis plus d'un siècle, 3^e ed., Le Clerc, 1817, 46 p.

(7) 一八七〇年代に入ると、フランスは、教会から独立した公教育制度の確立をめざして外国の教育制度を盛んに研究するようになった。その成果が、八〇年代初頭にみられるジュール・フェリー文相の英断的施策である。七〇年代のものとしては、当コレクシオンに次の三資料がある。De l'éducation des femmes et des écoles publiques de garçons en Angleterre, Devaux, 1871, 109 p. (著者不詳): HIPPEAU C., L'Instruction Publique aux Etats-Unis. Ecoles publiques, collèges, universités, écoles spéciales. Rapport adressé au Ministre de l'Instruction Publique, Didier et Cie, 1870, 447 p.: HIPPEAU C., L'Instruction Publique en Angleterre. Didier, 1872, 138 p.

近代フランスにおける教育の諸相と展開

- (8) Dewey J., (traduit par PIMOUX L. S.) *L'Ecole et l'Enfant*, Delachaux & Niestlé, 1913, 136 p. (ポロントマン収録)
- (9) MONTessorI M., *Il metodo della Pedagogia Scientifica applicato all'educazione infantile nelle case dei Bambini*, Magliane & Strini, 375 p. (ポロントマン収録)
- (10) FERRIÈRE A., *L'Ecole Active*, 2 vols, Neuchatel & Genève, 1922, 205 p. (ポロントマン収録)
- (11) CLAPARÈDE E., *L'Education fonctionnelle*, Delachaux & Niestlé, 1931, 266 p. (ポロントマン収録)
- (12) DECROLY O. & BURSE R., *La Pratique des Tests Mentaux*, 2 vols, Alcan, 1928, 402 p. (ポロントマン収録) (デットクロリの著作に関しては、代表的作品が収録されていないのが残念である。)
- (13) スペイン人のロヨラ Loyola Ignatius de (1491-1556) によって、パリで、イエズス会 La Compagnie de Jésus が結成されたのが一五三四年であり、フランスでこの会が公認されたのが一五六一年である。しかし、イエズス会はこの公認に先立つこと五年の一五五六年に、ピロームにフランスにおける最初のコレージュを設立している。イエズス会は一五八四年に、学校教育の諸規定を定めた『学事規則』Ratio studiorum を作成(最終稿は「一五九九年」)。一七五〇年頃には、六〇〇を越える学校をヨーロッパに教える程の勢力をもった。
- (14) 一五三〇年代に至るや、フランスにおける母国語使用の動きが表だってきた。ラブレール RABELAIS F. (1483-1553) が一五三二年以降著し続けたパンタグリユエルおよびガランチュワ物語がフランス語で書かれたこと。一五三九年には、

公文書をフランス語で認めることを決定・命令したヴェー
ル・コトレの勅令 *Ordonnance de Villers-Cotteret* が発令
されたこと、一五八〇年には、モンテーニュがフランス語で
書いた『エッセー』が出版されたこと、その他、経済界・商業
界のフランス語使用が高まってきたことなど、具体的な動き
が多くみられる。学童は、既にフランス語を覚えていたの
で、ラテン語教育がますます厳しく課せられるようになって
いた状況は、モンテーニュによっても記されている（『エセ
ー』第一巻、第二十六章を参照）。

(15) 当コレクションに含まれている王子教育論として注目すべ
きものは、本文中で指摘しているフルーリイの『学習の選択
と方法についての論述』の他に、次の作品である。

LA MOTHE LE VAYER de, *La géographie du Prince*,
Billaine, 1669, 215 p. (ナント十四世のために編まれたもの)
: NICOLE P., *Traité de l'éducation d'un prince*, Charles
Savreux, 1671, 428 p. (ポール・ロワイヤル派の代表的人
物、モネール・ニコルによる王子教育論) : VARILLAS A.,
La pratique de l'éducation des Princes, Claude Barbin,
1684, 467 p. : FOIX, Père de, S. J., *L'Art de former
l'esprit et le cœur d'un prince*, Claude Thiboust/Pierre
Esclassan, 1688, 290 p.

(16) 貴紳教育論の文献としては、次の作品が認められる。LA
CHÉTARDIE, Chevalier de, *Instructions pour un jeune
Seigneur, ou l'idée d'un galant homme*, Girard, 1683, 90
p.+90 p.

(17) モンテーニュの『エッセー』第一巻の第二十六章「子どもの教
育について」は、この類型の先駆的作品の一つである。当コ
レクションには、この範疇に入る十七世紀のものとして、

次の二点がある。RABUTIN Bussi, Comte de, *Discours
du Comte de Bussy Rabutin à ses enfants, sur le bon
usage des adversitez, & les divers événements de sa vie*,
Anisson, 1694, 454 p. (これは父から子どもたちに与えら
れた人生訓である) : BORDELON, Abbé, *La Belle Edu-
cation*, Vue Guillimin, 1694, 525 p. (修道院長たる神父が、
親たちに向けて書き記した、子どもに対する理想的教育論。)

(18) 十七世紀に出版されたカテキズムで、当コレクションに含
まれているのは、次のものである。LE BLANC P., *Le Ca-
techisme royal en vers ... dédié au Roy, Chez l'Auteur*,
1646, 76 p.+88 p. (青少年の教育のために書かれたキリス
ト教教義ならびに聖人伝であり、当時、フランスのすべての
学校で使用されたカテキズムである。作者は、パリ大学の
ギリシャ語・ラテン語教授であった) : FLEURY, Abbé de
Loc-Dieu, *Catechisme historique, contenant en abrégé
l'Histoire Sainte & la Doctrine Chrétienne*, André Cheva-
lier, 1683, 112 p. (同じく、聖人伝とキリスト教教義から成
る史伝体的カテキズム)。

(19) SACCHINO F., *Parsensis ad Magistros scholarum in-
feriorum Societatis Iesu*, Typis Iacobi Mascardi, 1625,
167 p., (relié ensemble avec) *Proreptionem ad Magistros
scholarum inferiorum Societatis Iesu*, Typis Iacobi Mas-
cardi, 1625, 310 p.

(20) CUSTEL P., *Les règles de l'éducation des Enfants,
où il est parlé en détail de la Manière dont il se faut
conduire, pour leur inspirer les sentiments d'une solide
piété : & pour leur apprendre parfaitement les Belles
Lettres*, 2 vols, E. Michallet, 1687, 398 p.+462 p. (前冊

ンタシヨム収録)

- (21) MASSER J., *Exacte et facile achèvement de la langue française*, Balthazard l'Abbé, 1613, 288 p.+62 p. (『言語は』ラテン語から俗語へ入る語学教材で、十七世紀初期の教科書の典型をなすものといわれる。但し、この教材は『フランス語を学ぶ外国人学生のために書かれたものである。』) : *Nouvelle méthode facile, pour la traduction du Latin en François, et du François en latin*. Claude Thiboust, 1680, 222 p. (著者不詳) (共に『当コロンシヨム収録』) : ヤンセン派のランスローは、ラテン語文法をはじめフランス語で解説したテキストをあらわした。これによつて学童たちは、それまで三年かかつて学んだものを、六ヶ月で学べるようになったといわれるほど、画期的な出版物であった。この本も、長きにわたつて版を重ね、フランスの学校で使用され続けた貴重な文献である。LANCELLOT Cl., *Abrégé de la nouvelle méthode présentée au Roy, pour apprendre facilement la langue latine*, Charles-Nicolas Poitron, 407 p. 1742 年版。(『コロンシヨム収録』)
- (22) VENERONI, Sieur de, *Nouvelle méthode pour apprendre la langue italienne avec grande facilité et en tres peu de tems*, Etienne Loyson, 1688, 116 p. (『コロンシヨム収録』)
- (23) MAINTENON, Madame de, *Règlements et usages des classes de la Maison de S. Louis établie à Saint-Cyr*, Paris, 1696, 61 p.+90 p.+117 p.+52 p.+17 p.
- (24) SUARD, Madame, *Madame de Maintenon, peinte par elle-même*, Maradan, 1810, 422 p. : LAVALLÉE Th., *Histoire de la Maison Royale de Saint-Cyr*, 1686-1793,

近代フランスにおける教育の諸相と展開

Furme, 1853, 364 p. : CHATENET E., *Conseils et instructions aux demoiselles pour leur conduite dans le monde, par Mme. de Maintenon*, Ardant, 1857, 239 p. : GRÉARD O., *Madame de Maintenon. Extraits de ses lettres, avis, entretiens, conversations et proverbes sur l'Éducation*, 5^e éd. Hachette, 1899, 286 p. (『コロンシヨム収録』)

- (25) PRÉVOT J., *La première institutrice de France, Madame de Maintenon*, Éditions Belin, 1981, 287 p.

(26) ジョーンリス夫人は、一七八二年にオルレマン公 Duc d'Orléan (後のルイ・フィリップ王 Louis Philippe) の息女次いでその子息たちの傅育官 gouvernante を任ぜられ、教育論・道徳論・演劇論等をあらわした。それらに認められるオリジナルな教育体系は、十九世紀においても大きな影響を与えた。革命後は、ナポレオンにも重用され、幼い子どもたちへ与えるべき道徳の教えや寓話、脚本、歴史講話を書き残した。マントノン夫人に私叙し、その思想に傾倒し、『マントノン夫人伝』を二冊書いている。当コロンシヨムには、彼女の著作のうち四点が入っているが、二点のみを列挙しておく。GENLIS, Madame de, *Annales de la Vertu, ou Cours d'Histoire à l'usage des jeunes personnes. Par l'auteur du Théâtre d'Éducation*, 3 vols, Lambert & Baudouin, 1781, 304 p.+338 p.+302 p. ; *Nouvelle méthode d'enseignement pour la première enfance*, Maradan, 1801, 469 p.

(27) フュヌロンの『女子教育論』は、当コロンシヨムに二冊(一七四〇年版・一八九二年版)収められている。後者には『死者の対話』があらわせ入っている。FÉNELON, Salignac de la Mothe-, *De l'éducation des filles, augmentée d'une*

lettre du même Auteur à une Dame de Qualité sur l'éducation de sa fille unique, Maïette, 1740, 299 p.; De l'éducation des filles. Dialogues des morts, et opuscules divers composés pour l'éducation de M. le Duc de Bourgogne, Firmin-Didot, 1892, 540 p. など、『テンプルマンの冒険』の補遺として書かれた「帝王の心得を論じた著作が、当ロレンションに存する。Directions pour la conscience d'un Roi, composées pour l'instruction de Louis de France, Duc de Bourgogne ... pour servir de Supplément au Télémaque, Neaulme, 1748, 107 p.

(25) ランベール夫人のこれらの著作は、次の『ランベール夫人全集』に含まれている。LAMBERT, Marquise de, *Œuvres de Madame la Marquise de Lambert, avec un abrégé de sa vie*, 2 vols, Ganeau/Bauche fils / d'Houry fils, 1751, 382 p.+407 p. (当ロレンション収録)

(26) ローランの教育的見解が示されている『学習論』*Traité des études, de 1726 à 1728* は残念ながら、当ロレンションには含まれていないが、彼の専門領域の大作『ローマ史』(全八巻)のうち、第一、第二、第三、第四巻の手稿が存在する。ROLLIN C., *Sommaire de l'Histoire Romaine*, [manuscrit : vol I, 387 p., vol II, 379 p., vol III, 370p., vol IV, 361 p.]

(27) たてがみ「下」の二冊を参照。BELLEGARDE, Abbé, *Œuvres diverses de M. l'Abbé Bellegarde, contenant les règles de la vie civile; avec des traits d'histoire pour former l'esprit d'un jeune prince*, Robustel, 1723, 504 p. (Tome IV, seul): BAUDOUIN, Abbé, *De l'éducation d'un jeune Seigneur*, Jacques Estienne, 1728, 251 p. (共編)

当ロレンション収録)

(31) この期のイエズス会の教育への意欲を示唆する文献を一部挙げるならば、次のようなものがある。BUFFIER, Père, *Les principes du raisonnement exposés en deux logiques nouvelles*, Witte, 1714, 526 p.; CROISER J., *Heures et Règlement pour Messieurs les Pensionnaires des Pères Jésuites. Contenant les Exercices ordinaires du Chrétien, avec diverses Pratiques de Piété*, 5^e éd. Bruyset, 1739, 325 p.; PORÉE C., Père, *Caroli Poré, e Societate Jesu. Tragediae*, Marcus Bordelet, 1745, 477 p. (修辭學者ボヘ神父は、ヴォルテールの師でもあり、十八世紀初頭のアカデミー・フランセーズの会員の三分の二は、すべて彼の教え子だったという。イエズス会員「ボレ神父」は、当時、最高の修辭学教師であった。) (以上、当ロレンション収録)

(32) DE VIGUERIE J., *Les collègues en France*, in *Histoire Mondiale de l'Éducation*, Tome. 2, sous la direction de MIALRET G. et VIAL J., P. U. F., 1981, pp. 301-315

(33) *ibid.*, p. 309

(34) イエズス会の追放については、当教団を弁護する著作もある。CÉRUTTI, Père, *Apologie générale de l'Institut et de la doctrine des Jésuites*, 2^e éd. Jacques-Phippe Schaefer, 1763, 576 p. (当ロレンション収録)

(35) ルソーの『エミール』は「フランドル」ロッタをほじく多くの教育論に負うところがあるが、同時代の文獻で影響を与えていると思われる労作が、次のものである。BONNEVAL de, *Les éléments de l'éducation*, Pault, 1743, 104 p.; *Progrès de l'éducation*, Pault, 1743, 232 p. (当ロレンション収録) また、ルソーの『エミール』に對する批判

は、ヴォルテールをはじめとする多くの識者によって厳しく行われたが、ドイツの新教の牧師で、『エッセール』批判をした人がある。FORMEY J., *Abrégé de toutes les sciences, à l'usage des enfants de six ans jusqu'à douze*, Jaquenod Père & Rusanod, 1766, 77 p.

- (36) たとはは GREVIER, J.-B.-L., *Difficultés proposées à Monsieur de Caradec de La Chatais, Procureur général au Parlement de Bretagne, sur le Mémoire intitulé: "Essai d'Education Nationale ou Plan d'Etudes pour la jeunesse"* (Présenté au Parlement le 24 mars 1763), Paris 1763, 67 p. (著者のクハヴィエールはボーヴェ学院の教授であった。) (ニコロクシモン収録)

- (37) CÉRUTTI, Père, *Apologie générale de l'Institut et de la doctrine des Jésuites*, Soleure, Jacques-Philippe Scherer, 1763, 576 p. (ニコマンシモン収録)

- (38) これらの資料のうち、ディドロ DIDEROT D. (1713-1784) の作とされる『公教育について』 *De l'éducation publique*, Amsterdam, 1762, 235 p. であるが、ロシアのエカテリーナ二世 EKATERINA II (1729-1796) のために公教育論を著したのは一七七六年であるから、この作品がディドロの執筆になるものであるかどうかはフランスにおいても疑われている。注の(36)に示したクレヴィエの作でないかという説もある。しかしまた、ディドロがこの『公教育について』を書かなかったと断言することはできない。(ニコマンシモン収録) 従、DOLLE J. M., *Diderot: Politique et Education*, Vrin, 1973, p. 132 を参照。

- (39) MIRABEAU G., *Discours de Monsieur Mirabeau l'Aîné sur l'Education Nationale*, Lejay, 1971, 79 p.; *Travail*

sur l'éducation publique, trouvé dans les papiers de Mirabeau l'Aîné, Imprimerie Nationale, 1791, 206 p.

- (40) TALLEYRAND Ch., *Rapport sur l'instruction publique fait au nom du Comité de Constitution à l'Assemblée Nationale, les 10, 11 et 19 septembre 1791*, Baudouin/du Port, 1791, 216 p.

- (41) CONDORCET, *Rapport et projet de décret sur l'organisation générale de l'Instruction Publique*, Hachette, 1885, 135 p. (教育事業 COMPTON COMPAYRÉ J.-G. (1843-1913) による解説が加えられ、出版されたもの)

- (42) LANTHENAS F., *Bases fondamentales de l'Instruction Publique et de toute constitution libre, ou moyens de lier l'opinion publique, la morale, l'éducation, l'enseignement, l'instruction, les fêtes, la propagation des lumières, &c. le progrès, de toutes les connaissances, au Gouvernement National-Républicain*, 2^e éd., Imprimerie Nationale, 1793, 656 p.

- (43) LE PELETIER M., *Œuvres de Michel Le Peletier*, Arnold Lacroix, 1826, 502 p.

- (44) BOURDON L., *Recueil de 19 pièces ou opuscules reliés ensemble en 1 volume*, Paris, 1793 (この中でペールシモンは、子どもは親から離れて、国家が彼等を教育すべきであるという、典型的な革命教育論を展開している。)

- (45) BARÈRE B., *Rapport fait à la Convention Nationale, au nom du comité de Salut Public, le 13 prairial, par Barrère, sur l'Education révolutionnaire, républicaine et militaire; et, Décret sur la Formation de l'Ecole de Mars*, La Convention, 1794, 50 p. (この時期に至るまで、共

和主義と革命と軍事は同類語化されてゆくのがわかる。)

- (46) たゞえだ Madame Le Prince de BRAUMONT, *Le mûsagin des pauvres, artisans, domestiques, et gens de la campagne*, 2 vols, Pierre Bruyset-Pontus, 1769, 419 p. + 364 p. (当ロレクシオン収録)

- (47) PLEVOST (citoyen), *Véritable Civilité républicaine, à l'usage des jeunes citoyens des deux sexes*, Pierre Leconte, 1794, 68 p. は貴重な文献である。(当ロレクシオン収録)

- (48) RIBALLIER, *De l'Education Physique et Morale des Femmes, avec une notice alphabétique ce celles qui se sont distinguées dans les différentes carrières des Sciences & des Beaux-Arts, ou par des talents & des actions mémorables*, Frères Estienne, 1779, 494 p. は、専門家にのみが読んでいる貴重文献である。(当ロレクシオン収録)

- (49) これに関する資料を、二点のみ列挙しておきた。MENTEL, *Cosmographie élémentaire, divisée en parties Astronomique et Géographique*, Chez l'Auteur, 1781, 429 p. (著者のメンテルは、ルイ十六世に地球儀を作成した有名な地理学者である。)(当ロレクシオン収録) : MULLIN A. L., *Éléments d'Histoire Naturelle*, 2e éd., 1797, 563 p. (著者の「ミラン」は、中央学校 Ecole Centrale の教師、やがて総裁政府 Cabinet des Médailles の保守党員になった。彼は、フランス人に博物史と天文学への興味を植えた功績者の一人であるといわれる。)(当ロレクシオン収録)

- (50) DUPAIN-TRIER M., *Coup d'œil sur l'établissement de Collèges municipaux, pour les sciences, arts et métiers, en faveur de la jeunesse*, Collot et Fournier, 1790, 38 p.

(当ロレクシオン収録)

- (51) MAYEUR F., *op. cit.*, p. 83 注(3)を参照。

- (52) これにインパクトを与えたのは、ルソーの『エミール』であろうが、理論面のみならず現実面でも子どもへの関心が高まってきているということは、たとえば児童向け百科全書の出版といった事例にもあらわれてくる。FORMEY M., *Encyclopédie des enfants, ou abrégé de toutes les sciences à l'usage des jeunes personnes*, Jean Samuel Cailler, 1787, 202 p. (当ロレクシオン収録)

付記—(当ロレクシオン収録)と付されていない文献については、本文中でその旨が明らかにされている。

(一九八四・秋)